
境界線上の幻想郷

葛根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線上の幻想郷

【Zコード】

Z7538Y

【作者名】

葛根

【あらすじ】

たぶんハーレムになると思います。

時空系列など気にしたら負け。

基本的に軽いノリで読んでいただけると助かります。

なお、原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが含まれております。

原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第一章 境界線内の幻想達（前書き）

独自の解釈やキャラ崩壊がありますのでそれらが気になる方にはオススメしないです。

それでもいいよって方で、読んでもいいよって思つていただける人は続きを読むをどうぞ。

第一章 境界線内の幻想達

霧雨魔理沙とパチュリー・ノーレッジの間に男がいる。
紅魔館の図書館、その一角にテーブルや椅子があり、机の上にはソファーや簡易ベッドまである。

何故、二人の間に男がいるかという疑問に答えるなら、二人に取つてその男は必要な人間だからだ。

「所でツムグ、まだ、靈夢の神社に居候してゐるの？」

「そうだぜ。人里で家を借りろ。いや、香霖堂に世話になれよ」

何度もこのやり取りはしたことがある。
しかし、答えはいつも同じで

「靈夢は放つておくと碌な食生活しないし、怠けるし、腋だして
し。ま、放つて置けない駄目娘だめこなんだよ」

博麗靈夢は自堕落な駄目巫女だ。

幻想郷において重要な役割を果たしてゐるはずなのだが、本人はあまり判つていな様子である。

異変が起きている時の勘の良さと働きつぶりの一割でもいいから平時の時に分けると言いたい。

だから、変態八雲紫に馬鹿にされるのだ。

「放つて置けないつてなあ。アレはもう直らないんだぜ？」

「ひどい事いつなよ。月に一回位は神事だつて、やるよつとなつたんだ」

以前は思いつきでやる程度の神事を月一に行つまでに改善した。とはいっても、人里にふらりと訪れて古い屋みたいなことをすることもある。悩み相談を聞いたり、妖怪の話を聞いたりする曖昧な仕事だ。

実際、神事に関わる禊みそぎやお祓いは幻想郷においてあまり重要ではないにせ人間と妖怪が共存しているのだ。

宴会を神事に含めるのなら割りと働いている事になる。

大宴会などは異変解決後に行うし、毎日妖怪の誰かが博麗靈夢の食事、というか俺の料理を食べに来るのだが、それを神事と言つていのだろうか？

頻度が高いのが亡靈である西行寺幽々子なので、神事のお祓いに当たる仕事だといえれば言い訳になるのだろう。食うだけ食つて帰るし。

「え？ あの靈夢が？ そんなバカな？！」

パチュリーが驚愕している。そんなに驚かなくとも。いや、駄目巫女の噂は既に殆どの妖怪や能力持ちの者に伝わりきっている。

俺は何人にも同じような話をしたが信じられないという顔をする奴らばかりだ。

敵は多いぞ、靈夢よ。

と、思い出す。紅魔館の図書館に来たのはパチュリーに呼ばれたからである。

この幻想郷の癖のある奴らと話すとどうも脱線する。

「ところでなんで俺を呼びつけた？」

「え？ ああ、貴方の能力が必要だからよ」

「そうだぜ。これから、魔法研究というなの実験をやるからな。ツムグの【力を分け与える程度の能力】があると助かるんだぜ？」

要はタンクになれということか。

はいはい、どうせ、俺には戦う能力がないですよ。なにせ、能力が力の供給だ。魔法タンクとか、靈力タンクとか呼ばれてますよ！ こいつらには内緒だが、守矢の神社の奴らに執拗に付け狙われているんだぞ。

諏訪子と神奈子にも力を、神力を与えられるとバレてしまつて いるからな。

二人とも全裸耐性が付いており、厄介だ。

東風谷早苗には耐性は付いておらず、久々に初々しい反応を見れた。幻想郷において全裸ネタが通じる人物は少ない。

俺の心のオアシス！ 東風谷早苗！

靈夢然り、魔理沙、パチュリーに全裸ネタをしたことがある。股間の部分は魔力と靈力でぼかしの入れた状態だったが、三人とも冷めた反応であつた。

靈夢は

『で？ 昼食なに？』

だつたし、パチュリーは

『ああ、魔力と靈力の複合技術ね？ 全く無駄な技術ね』

と分析するし。

魔理沙は

『？死ねよ？』

だった。

意外にも、風見幽香が乙女だった。
あの時の恥らう顔とマスタースパークの威力は忘れる事はないだらう。

半死の全裸状態の俺を拾つて博麗神社まで届けてくれた射命丸文には文々。新聞購読という行為で現在進行形でお礼を返している。

適当に魔力供給して、俺には理解のできない魔法実験を行い満足気に入一人して俺に微笑んだ。それをお礼と受け取り帰宅することにした。

魔理沙は泥棒稼業から足を洗つたらしい。

一時期、俺が紅魔館でレミリア・スカーレットの妹、フランドール・スカーレットの面倒を見るというバイトをしていた時期にパチュリーに頼まれて魔理沙を挾撃した。

その後、話し合いの結果、紅魔館図書館でパチュリーと魔法を研究、技術協力したほうが、効率よくね？ということで落ち着いた。パチュリーの愉悦した笑みは触れてはいけないと思つた。

フランドール・スカーレットに対しては文々、というか、狂つていたので常識力とか知力とか認識力とかコミュ力などをバランスよく供給することにより、”普通”を学習させていたのが功を奏して今では姉妹揃つて時たま出かけるまでになつていて。

十六夜咲夜はこの事に関して、

『私の萌え成分が増えたことに感謝します』

など戯言を述べていたので、常識力を供給しておいた。
もちろん、変化などなかつた。ロリコンであり、変態紳士であつて
それが彼女の常識なんだろう。

紅美鈴の乳とパンツを見に用事もないのに度々紅魔館に訪れる俺も
どこか常識というものが欠けているのだろうか？
いや、紅美鈴が居眠りの最中に服を多少ズラしたりめくつたりする
程度では起きないのが悪いのだ。

最中に目覚められるとお話と書つ名の肉体言語を用いてくるのでそ
の時は逃げるに限る。

俺の奇襲が何度か会つた後、彼女はついに居眠りをしなくなつてしまつた。

そうではない。俺の発する気を覚えて、俺の気が近づいた時のみ起
きるようになつたのだ。

『来ましたねー？私、寝てませんよ？ええ、貴方の気は覚えました
からね』

俺だけに反応していっては駄目だと思つ。

『あら？ もう帰るの？』

レミリア・スカーレットだ。

毎回思つが、500年以上生きているとは思えない。
美少女であるが、『私、レミリア・スカーレット。小学5年生』と
言つてもまるで違和感がないと思つ。

実際、その位の年齢に見えるし、10歳と言われても信じるだろ？。初めて会った時のカリスマ性はどこかに行ってしまったようだ。レミリアにも全裸ネタは通じなかつたな。

初対面で全裸ネタやつたのに

『ふつ』

と微笑を浮かべて弾幕撃つてきたつげ。

「夕食を作らないとウチの駄目巫女が怒るからな」

「まだ、靈夢んとこにいるのね。父親？ というのは失礼ね、面倒見のいいお兄さんと言つた所かしら。お兄さんと言えば、フランがお兄ちゃんが欲しいと言つていたわね。そうね。貴方、フランの兄ね。あら？ そうなると私の兄にもなるのかしら？ それとも弟かしらね？ 精夢達と年も近いし、やはり弟ね」

また、勝手に話を進めて決定しやがる。

「フランも確実に俺より年上だが？」

「いいのよ。フランが兄と思うなら兄で」

妹が全てに優先されるルールらしい。

「それより、他人行儀な喋り方はよしなさい。私達は兄妹なのよ？」

「兄妹は決定なんだな？！」

スカーレット姉妹は家族愛に餓えているのだろう。

友達は最近増えているみたいだが、家族に見せる素の自分というものを模索していると予測。

咲夜は姉と振舞つているが、まだまだ、足りないのであらう。

甘えたい年頃といつには随分な年数を積み重ねているが、容姿的には親に甘えている年頃だ。

「はあ、好きにしる。明日、博麗神社に遊びに来るといい」

「そうね、フランと私、咲夜とパチュと美鈴で行くわ。またね。お兄さま？」

カリスマを氣取つてゐるなあ。

抱つこしてお別れの挨拶をして紅魔館を出た。

「お帰りですねー？ では！」

「おつ、じゃあの」

美鈴は俺を客として扱わないので氣軽でいい。

門から数歩の所で飛んで帰つた。

第一章 境界線内の幻想達（後書き）

東方MMD射命丸 文の白玉楼突撃取材など見たら書きたくなつて書きました。

第一章 食事場のジャイアーズム（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

第一章 食事場のジャイアーズム

伊吹萃香がいた。

博麗神社、靈夢の自室に当たる部屋に勝手に入り込んで既にアルコールを飲んでいた。

靈夢はこの時間夕食の材料を人里に買いに行っているはずである。よつて、今、この瞬間、この場合、靈夢の部屋にいるということは不法侵入したことだ。

「おう～、摘みは？」

「ねえよ」

「え～、摘みい、摘みい！」

ガシガシと腕を左右に振られる。

力を加減されているが、こちらが摘みを出すというまでは絶対に離さない気だ。

この美少女もまた、妖怪である。

怪力の持ち主で、俺の腕を握り潰す事くらい簡単にやつてのける。腕を握り潰してしまつたら摘みが作れないから握り潰さないのか、それとも実力者として認められているのか。

まあ、前者だ。

しうがねえなあ、と前置きし、

「干し柿と漬物で我慢しろよ？ 夕食は食つていいくのか？」

「わーい。食つ」

アルコールの入った瓢箪^{ひょうたん}と頭に生えている一本の角がなければ子供に見えるだろうな。

餌付けされた鬼は手間が掛かる。

しかし、萃香には博麗神社の地酒、”博麗酒”の元になる酒虫のエキスを分けてもらつた恩がある。

エキスを塗つた瓢箪から創りだされる酒を100倍ほど薄めることで人間でも飲めるアルコール度数になっている。

ただの水から酒ができるので儲かる。

何せ何年も寝かした酒より博麗酒の方が、うまいし安いのだ。

萃香は薄めるなんてトンデモナイなど言つていたが鬼と人間ではアルコール耐性が違う。

「ふおういへば……、んぐ、ふはあ。そういえば、守矢神社んとこの早苗がフラつと口に来てツムグさんいませんか？ って聞かれたららいませんよつて答えたら帰つていつたぞ？ アレは何だつたんだろうなあ？」

「なあに、気にするな。ダダの常識に囚われていない痛い少女だ」

ついに本陣まで侵入してきたか！ 信仰の代行者め！

靈夢不在の隙を狙つていたのか、天然で現れて奇跡的に靈夢が不在だつたのかわからないが、前者なら行動パターンをどこかで監視していることになり、後者なら能力だ。

信仰の代行者。

守矢神社の住人で、現人神だ。

奇跡を起こす程度の能力の持ち主である。

自信に満ち溢れた行動力と天然が売り。なお、オパイはボイン。

「なんだあ？ その憐れみの目は？」

「これが持たざる者か……」

薄いな。

靈夢は慎ましやかに並。

メイド長も並。

PAD疑惑は俺が命を賭けた乳揉で解決した。

あの時は、うん。レミリアに救われたが、大きな代償を払つたな。紅魔館の掃除だつたり、メイド長に長期休暇を与える代わりに俺が代行してメイドの仕事をした。

その時に戦利品として各自の下着を手に入れたが、香霖堂を経て闇市場で高値がついた。

森近霖之助が本物であると鑑定書までつけて売りさばき、売上の7割ほど持つていかれた。

紅魔館の七不思議の一つ”消える下着事件”の犯人は主犯、俺。共犯、霖之助だ。

事件は迷宮入りしたが、もう一度と同じことがないよつに、厳重な防壁を作られた。

そんな事を思い出しながら萃香と適当に話をしていたら、家の主が帰ってきた。

「あれ？ 萃香も来てたんだ」

博麗靈夢の横には、四季のフラワーマスターの一一つ名を持つ人物。風見幽香がいた。

彼女は伊吹萃香と同じく気まぐれで博麗神社に遊びに来る。靈夢とお茶を飲んでいるのを見かける事が多い。

お茶会のようなものである。お茶会のある日は必ず夕飯まで一緒に食べて、宿泊していくのだ。

何故か、靈夢と幽香は一緒に風呂まで入るが理由は聞かない。同性同士なのだから別に問題ないのである。

萃香と幽香。似た名前であり、お互に顔見知りになり、今では仲も良い。妖怪同士何か通じるものがあるのだろう。

幽香は萃香を妹のように可愛がる節がある。萃香も別に嫌がりはせず、されるがままだ。

実の所、昔、二人はガチバトルしたことがあるらしい。

その後、しばらくお互いに不干渉だったが、靈夢が現れ、一人共、靈夢に倒された。

そして、博麗神社に再戦として乗り込んできた時に萃香と幽香が鉢合わせになり、その時に色々なやり取りがあり、今に至る。風見幽香には痛い目に合わされたことがある。

一度目は初対面で全裸で遭遇した時だ。

あの時俺は幻想郷を隅々まで冒険するという生活をしており、大体の妖怪には全裸で対応していた。

当時の服は俺の意思でページ可能な特別な服で一瞬にして全裸になるという機能が付いていた。

しかし、幽香にソレを見せた際に俺ごと、マスタースパークで吹き飛ばされてしまった。

俺は助かつたが、服はボロボロになつた状態で河城にとりに回収されてしまい、きゅうり30本で修理、追加きゅうり100本で譲つて貰い、今は筆笥たんすの中に仕舞つてある。

二度目は靈夢に男がいるという噂を聞きつけた幽香が博麗神社に行き成り現れた時だ。

俺が博麗神社に居候を始めて二ヶ月位の頃ほどだったはずだ。

靈夢と協力して幽香を戦闘不能にまで追い込み何とか理解を得た。

『力を分け与える程度の能力ねえ。それで？ 灵夢に協力して異変を解決？ それが続いて気付いたらお互いが意識し始めて、男女の仲に……！』

再熱した幽香だつた。

が、俺がいる限り、靈夢には無限に近い靈力が供給され続ける。再度、落ち着かせる為に戦いついには、

『つ……。厄介ね。貴方の能力。疲れたわ』

疲労したとは思えなかつたが、戦闘後の恒例？ の宴会で誤解は解けた。

どうも、俺の料理が気に入つたらしい。

その後も、花の世話を手伝つたりして幽香さんのご機嫌伺いをした。

『なるほどねえ。ツムグの能力で花に”生命力”や、病気への”抵抗力”を分け与えることで花を管理できるわけね』

フラワーマスターの名の通り。花の世話が好評であった。

花の鑑賞も好きだが、幽香のオパイも好きである。

サイズ的に上位存在であり、美人であるから見応えは抜群だ。

俺の視線に気付いて、

『？ 別に減るものでは無いからいいけど。ほどほどにしどきなさいよ？』

許可が出たと受け取り、鑑賞は現在も継続中である。

夕食後、四人で茶を啜り、月を見ながらの晩酌はなかなかオツなものである。

美女一人。美少女二人。

幻想郷の女性は美人が多い。

能力持ちの人間、妖怪は全員が美人、美女、可愛い、萌えるの成分を含んでいる。

改めて、思う。美女との晩酌は時間の経過が早い。

数時間前に、靈夢は萃香の酒を飲まされて死んだように眠っている。萃香もからかう相手がいなくなつたのと腹が膨れたので寝ると言つて靈夢と共に一緒の布団で寝てしまつた。

日付が変わらうとする時間だが、幽香と俺は日本酒を飲んでいた。

「ねえ？」

「ん？」

風見幽香は思つ。

この人間は変わつてゐる。

戦闘能力はその辺の人間と同じだ。

能力でなんとかしているらしく、多少、強めに殴つても平氣であるが、スペルカードを使つた所を見たことがなかつた。妖怪に相対する時、人間はスペルカードを使用する。しかし、ツムグは妖怪に對してスペルカードを使つたことがあるという話は聞かない。

ブン屋曰く、

『貴女が原因でもありますね。彼に危害を『え』ると博麗の巫女が報復に來ると、そういう噂です』

卑怯だと若干思うが、アレは負けたのではなく、面倒臭くなつた。戦い続けるのも悪くないが、こちらは疲労していくのに対し相手は疲労しない。

更に、消費するはずの力が供給され、永遠に戦えるのだ。それが理

解できたから面倒臭くなつた。

ツムグに焦点を置いて攻めれば恐らく勝てるだらう。ソレをしなかつたのは、要になるツムグに対して靈夢が何もしていなければいいと思つたからだ。

後日確かめたらやはり、防護符を持つていた。

ツムグを攻めれば靈夢に隙を与えることになり、こちらが負けてしまつ。

靈夢を倒すとなるとコレまた供給があるため、長期戦の末こちらが負けてしまう。

卑怯ね。

一定の能力持ちと組むことで幻想郷で強さのイニシアチブを握れるはずだ。

それをツムグが望まないとしても傀儡として操つてしまえば、無限供給される力を手に入れる事ができるというわけだ。

幻想郷を支配しようと考える妖怪は殆どいないだらうが、疑問に思つたことがあつた。

「幻想郷で勝てない相手はいるの？」

もちろん、ツムグだけなら勝てない相手の方が多い。

「いるよ」

酒が回つてゐるのか随分素直に答えてくれた。

「誰？」

「八雲紫」

なるほど、と思う。彼女は確かに強いのだらう。

萃香の友人である。知り合いであるが戦つたことはない。

相当古い大妖怪である。

「実際、境界を操る程度の能力は何でも有りだよ。力を分け与えるには対象を認識して意図的に分け与えているわけなんだけど、認識の境界をめちゃくちゃにされるか、力を分け与えているラインの境界をいじられるか、俺自身の存在の境界を操られたら終わりだ」

それに、

「生と死の境界を操られたら一瞬で死んじゃうよ」

酒を少し飲み、喉を潤して、

「それを誰にもしないのは紫が幻想郷を愛しているからだと思つ。気に入らないからと黙りこぼしてしまつたら全てを受け入れる幻想郷が嘘になる。それは八雲紫のしてきたことを否定してしまつ。と考えているのか、ただ面倒臭がりなのか。

掴みどころがないが、それも紫の良い所だと思う。胡散臭い口調の時は照れ隠しだつたり、裏にある意図を読ませないための行為だろうね

「なるほどねえ」

感心する。

なかなか思慮が深いらしい。
やはり、手に入れよう。

「ツムグ、私のモノになりなさい」

「」

驚いた顔も面白い。

正直に思えば、ツムグを気に入っている。

私の【花を操る程度の能力】で秘密にしていることがある。

それは、花や植物の声が聞けることだ。

花達は一いちから話かけるとそれに答えるように声を発するのだ。しかし、花から自発的に声を発することがあった。

『この人、暖かい』

『お礼、助けてくれた』

『命大事にする』

普通の人なら氣にも止めない道端の弱つている花にツムグが能力を使い元気にして、森で食べれる物を採取している時には多くの動植物に能力で力を分け与えているそうだ。

優しいと言つたか、馬鹿だ。

だからこそ、氣に入ったのだろう。

靈夢も可愛いが、コイツもなかなか良い所が多い。

手に入れてマイナス面がない。

それどころか、手に入れてしまえば、靈夢がおまけで付いてくるだろ。

退屈することが無くなりそうだ。

『酔つてるな』

『あなたにね』

靈夢と同じ、たまには勘というモノに身を任せてみようと思つ。

私の勘はツムグを手に入れれば面白い事になると告げている。

ツムグに身を寄せると、彼を、

「そんなに飲んだか？ いつもならこれ位で酔つ奴じやないだろ」

「言つたでしょ？ ツムグは私のモノなのよ？ わかる？ 貴方の

モノは私のモノ。私のモノは私のモノ

押し倒した。両腕の手首を掴み、馬乗り状態になる。ツムグは驚いた顔をしている。遅れて抵抗してきたが、力で私に敵つはずもなく、

「悪酔いだな……」

「どうかしらね？ 本当は解つてゐ癡に」

首筋から舌で擦るよ^{くすく}うに舐め上げて、頬を伝い、唇を奪い、舌を無理やりねじ込む事で口内を蹂躪した。

内心、強姦しているが立場が逆だわね。と思つ。一分程蹂躪を楽しむと、股に確かに熱さを感じた。

男性が気持ちよくなると硬くなるモノだ。

「んつ、やめつ」

辞めるどころか、もつと激しく舌を動かした。

彼の舌を吸い上げて唇で激しく扱く。

扱きながら舌も使う。

さらに、股にある熱い硬いものを擦るように腰を動かした。この行為でますます彼の抵抗が強くなつたが、両腕はがつちり固定してある。

また馬乗りの要領で腿で彼の腰辺りを挟みバランスよく乗る。

彼の両腕を私は左手一つ抑えつけることにして、開いた右手で彼の服を破り、脱がす。

「

何か言いたげだが舌を吸い上げられており、言葉を発することがで

きない。

一方で、私も下着をずらす。

服を脱げないが、月の見える廊下だったので、彼の表情がよく見え
た。

レイープは犯罪です。

配点：（警告）

第一章 食事場のジャイアーズム（後書き）

作業BGMは東方JAZZ

第三章 幻想の協力者（前書き）

この小説は東方Projectの一次創作です。
原作とは異なる設定、独自解釈、キャラクターの著しい崩壊などが
含まれております。
原作の雰囲気を重視される方はご注意ください。

満月の夜。

神社の長廊下に男女はいる。

男は寝転がつており、その上に跨る格好で女はいた。廊下を軋ませる程の上下運動が繰り返されている。

男女の表情は対照的であった。

男は泣いているような顔で、女は狂気を含んだような笑顔である。女が身体を震わせ、痙攣する。それに合わせるように男も身体を震わせ痙攣した。

幾度も痙攣を繰り返し、果てる。

果ててはまた、女が動き出し、廊下を軋ませる。

それを何回も続け、ついには男女の格好が逆転する。

水気を含む音が響き、また、果てる。

お互いに抱き合い、座つた状態で再度動く。

女の足が男の腰に纏わり付く様に絡まり、男の足の上に座つた女は満足気に唇を吸う。

着衣していたはずのものはなく、お互いに裸である。

抱き合い、座つた状態で互いに痙攣し合う。

身体の一部が繫がつたまま、状態を変え、女は犬のように俯せになり、男は激しく腰をぶつける。

今度は水と肉体がぶつかる音が響く。

あらゆる状態でお互いに快楽と、疲れに溺れ最後にはやはり、女が男に跨り、果てることになった。

異変に気付いたのは博麗靈夢であった。

いつもなら朝ご飯の匂いで起きるはずが、異臭で起きた。アルコール臭だ。

昨晩、いつの間にか寝てしまつたと曖昧な記憶を辿る。布団には酒臭い萃香が寝息を立てていた。

なるほど、原因はコイツか。

しかし、ツムグも寝坊か、珍しいこともあるものだ。日は昇つており、昼前位だろうか。

布団から起き上がり、顔を洗う。

服を着替えて水を飲む。

ふと、廊下に出た所で、完全に覚醒した。

「何？ これ……」

ツムグの服らしきものがボロボロになつて放置されていた。廊下には服以外のものではなく、清掃されたような痕跡と花の臭いが漂つていた。

幽香も来ていたはずだが、いつの間にか帰つたのだろう。廊下の清掃は醉つて何かこぼしたのだ。

「……。な、訳ないか」

「んー？ どうかしたのかー？」

起きたばかりの萃香だ。

博麗神社に感じる気配は私と萃香以外には無い。

本来いる筈のツムグの気配が無い。

幽香の気配も無い。

これらから導かれる答えは……。

「萃香、事件よ！」

【号外！ 博麗神社の居候、ツムグ氏拐われる？！】

文々。新聞の見出しだある。

昨晩ツムグ氏が何者かによつて拐われた。

記者こと、射命丸文が昼、博麗神社に訪れた際の、博麗靈夢氏は狼狽していた。（以下、靈夢氏）

詳しく述べ聞くと、靈夢氏が目を覚ますとツムグ氏がいなくなつていたようだ。

博麗神社の陰の支配者と噂のツムグ氏を誘拐した人物とは一体何者であろうか？

靈夢氏は語る。

昨晩、夕食時には、四人の人物がいた。

一人は靈夢氏、残りは伊吹萃香氏、風見幽香氏、ツムグ氏である。

その内、風見幽香氏とツムグ氏がいなくなつた。

また、ツムグ氏の衣服と思われるものがあり、その衣服はボロボロに破かれていた。

出血などの痕跡はないが、最後にツムグ氏がいたであろう場所には証拠隠滅の痕跡があり、事件性が高いと思われる。

なお記者は居なくなつた風見幽香氏を追うべく風見幽香氏自宅へと向かう。

今後の文々。新聞の真相解明を期待して欲しい。

次号！ 特派員、射命丸文は事件の真相に迫る！

射命丸文は喜んでいた。

無論、事件にあった人物に対してもなく、自分の新聞が好評であったからだ。

紅魔館、永遠亭、香霖堂などで非常に好評であった。
人里にも配つており、上白沢慧音も驚いた様子であった。
まさか、守矢神社が購読してくれるとは思わなかつた。

何気に、すごい人脈ですねー。

さて、風見幽香氏の自宅に付いたのだが、誰もいなかつた。

「どうじつことでしょー?」

とりあえず、写真を撮り、新聞のネタ帳にメモを書き込む。
自宅は昨日から空いている事になる。

帰ってきた痕跡がなく、風見幽香が犯人だとするなら、計画性の高い仕組まれた誘拐かと思ったのだが、突発的に思いついたようだ。
そうなると、ツムグの安否が心配になる。

計画的な誘拐なら命に別状はないだろう。何かの犯行声明なり、要求があるはずだ。

しかし、突発的な出来事だと、最悪、ツムグは食べられているかもしない。

妖怪の本能に従えばそなう。

未だに風見幽香からの要求も反応もない。
そこから考えられることは、

- ・ツムグを食べてしまい、まずいと思い、逃げた。
- ・ツムグを食べるため誘拐されたことにしている。

- ・まさかの、駆け落ち。
- ・計画的な犯行を突発的な犯行に見せている。

3つ目はないな。恋愛感情があるとは思えない。少なくともツムグにはないだろう。

可能性が高いのは一つ目。

2つ目は風見幽香自身がいないし、別妖怪が誘拐したと言つ発言がない。

4つ目だと事件解決させようとする意図が見える。

となると、裏では妖怪の賢者辺りが動いている可能性がある。

巫女に試練を「える名目で風見幽香と協力しているかも知れない。

「なんにせよ。情報が足りませんね」

少なくとも計画性のある犯行なら、自宅の荷物が減っていたり、留守にするための準備があるはずだ。

しかし、それらがない。

つまり、急ぎで情報を入手する必要がある。

犯行現場であろう、博麗神社に再度向かう。

「で？ どうしたいの？」

「匿いなさい。理由はそつね。靈夢に試練とでも言えれば良いわ

風見幽香にとつて僕倅だったのは、ツムグの人脈の広さであった。行為の後、朝日が見え始めた時にツムグは気を失うように寝た。そのまま、睡眠性の臭いを出す花を操り、寝かし続けることにした。

事後の処理として廊下を清掃し、自分は服を着て、証拠がある程度残しつつ、ツムグを抱え博麗神社を撤退した。

自宅で靈夢を迎えるのも良いかと思つて、矢先、八雲藍に出会つた。

「あの、その全裸はツムグさんですよね？」
「ええ」

口が弓が曲がる様に釣り上がるのを自覚しながら八雲藍を齧つて、八雲紫宅に招待させた。

八雲宅に付いた時は片手に八雲藍、もつ一方にツムグを抱えた状態だつた。

それを見て驚いた橙が八雲紫を叩き起つて、交渉になつた。

「藍を人質に交渉ねえ。で？ どうしたいの？」

「匿いなさい。理由はそつね。靈夢に試練とでも言えれば良いわ」

「ううう、藍様あ」

「ちえええん！」

うるさいわね。

まあ、人質になるとは思つていなide。

ツムグを起こして交渉役にしようかしら？

「遅からず、持つて3日だけど？」

「それだけあれば十分よ」

ふーん。といつ言葉とこひらを值踏みするよつた視線であったが、敵意はなかつた。

「童貞は奪われたみたいね。条件はツムグをこひらも、貸し”な
さい」

ツムグも初めてだつたのか。

貸す、か。できれば3日之内に墮落させて虜にされ予定なのだが、
ハ雲紫の能力があれば、色々と楽できそうだ。
損得勘定と効率面で見ればお釣りが来るか。

「その位は承認するわ。その代わり 」

紫様と風見幽香の顔はまさに妖怪じみていた。
取引内容はツムグさんの身体を弄ぶことらしい。

「いい機会だから、藍と橙も経験しどく?」

え?

「あら? 藍つて経験済みじやない? 橙も混ぜるなんて、貴女、
いい趣味してるとわ」

「藍は経験は無いわよ? 化かして、上手く避けていたもの。橙は、
まあおまけみたいなものよ」

決定でなかつたものが決定になつてゐる?!

紫様だつて経験無いはずです。

「ほひ」

と、風見幽香が全裸の、いつもなら靈がかかつてゐるモノが無く、

丸見えな状態のツムグを眼の前に提示された。

「興味津々ね」

決まりね、と言つた口調であつた。

緊急対策本部は博麗神社になつた。

そこには、博麗靈夢、霧雨魔理沙と射命丸文がいた。

「あや？ 紅魔館の人達は既に動いていと？」

「お前が居なくなつて直ぐに動いたぜ？」

「人里は慧音、永遠亭周辺はてゐとうどんげが動いてるわ。萃香は地下に向かつたわ。早苗達も動いてるみたいよ。ナズーリンがいればよかつたんだけどねえ」

靈夢は思つた以上にツムグの人脈があつた事に驚いていた。

犯人であろう、幽香の居所は掴めていない。

紫辺りが知つてそうだが、連絡しようにも連絡方法がなかつた。思えば長い付き合いのはずなのだが、八雲紫宅の場所を知らない。

「ま、ツムグだつて身を守る位の事はできるわ」

「そう言つて、握り拳作つてするのが可愛らしいですねー」

「アソッ、スペカ下手だからな。スペカ下手つて斬新だぜ？ これ、流行らそつかな。お前、スペカ下手だな。みたいに」

そこは、頷いておこづ。

スペルカード作るのが下手くそで、結局、自作のは一枚しか持つて

ない。

スペルカードルールができてからのツムグの立ち位置はタンクだからなあ。

「それにして、幽香は何を考えているのかしり？」

「あやや？ 犯人は幽香さんで決定ですか？」

「勘よ」

「勘ね。話を聞く限り間違いじゃなさそうだぜ。まず、私は香霖堂で霖之助を締め上げてくるぜ！」

私はどこへ向かうべきか。

魔理沙は飛んでいいが、私の勘では霖之助はハズレだろ？

「で？ 文、何か思う所があるんじゃないの？」

何故か取材後、新聞を最速で配つてまた「」に帰つてきたといつことは何かつかんだのだろう。

「あやー。あまり、言いたくないのですが、ツムグは食べられたのでは？」

「そんなわけないじゃない！」

珍しく、大声を出してしまつ。

それに対して文は驚いた様子だった。

しかし、ふうと呼吸をし、

「いや、可能性の問題ですよ。突発的に食べてしまつて、まずいと思つて隠れている。と私は考へてしまいまして。それで、現場である神社をもう一度調べて新しい発見が無いかと思ひはせ参じたわけとして、「

と言い、現場付近を隈なく調べ始めた。
それに協力する形で、私も廊下を中心に調べることにした。

この位のH口なら大丈夫だと思つ

視点：作者

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7538y/>

境界線上の幻想郷

2011年11月24日12時45分発行